

「いやあ、やった、達成した、歩いてきた、走破だ」自慢話を、苦勞話を書くぞとペンを持った。二日目ぐらいに歩きながらあちこちの標識を見て気付いた事は“大峰奥駈道”と前回に書いていたが漢字が違う、正式には“大峯奥駈道”が正しいようだ。漢字辞典では“峯”が正字だそうだ。“駈”“驅”は両方とも「かける」だが「駈け足」と使い「驅使とか驅除」と使うのだそうだ。もう一つ気付いた事は、この道のほとんどが奈良県内だったこと、半分以上が和歌山県内だと思っていたが、和歌山県は“熊野本宮神社”近くの少しだけだった。奈良時代・平安時代から“熊野詣で”という言葉が記憶の底に在り、奈良県の範囲はちょっとで和歌山県が主体だと思い込んでいた。今回の7日間の行程で、和歌山県は最後の一日だけだった。

1日目：吉野水分神社（みくまり）に居る、吉野駅から歩いてほぼワンピッチ、雨が降っている、きつい雨ではないが、ヤッケを通して雨に濡れる、汗でも濡れる、荷が重い、靴の中も濡れてきた、この靴の濡れが最後まで乾かなかった、ふうふうだ。後醍醐天皇、千本桜、西行と知っている名前が出てくる、寺院建築も立派だ、千年ぐらい前の建造物かな。有名な観光地“吉野”の街並み、南北朝時代の南朝の地だ。8：20 吉野駅に到着、9：00 に出発した、明日も雨模様だという、二日も降られたらいやだと思いながら歩いた。気温は12度C、桜の名所だけあって、アスファルト舗装の道路には、まだ桜の花びらが路面に貼りついて残っている、木々の葉はもはや新緑。4：00 “二蔵宿小屋”に着いた「鍵がかかっていたらいやだねえ、こんな雨の中、ツェルトで寝られないねえ」と話しながら扉はすつと開いた。小さい小屋、施錠はされていない「よかった、泊まれる、どなたもいない」途中の看板に「小屋の先が通行不能なので、迂回せよ、時間がかかるので気を付けるよう」とあった、「??」「思い出した、去年も下の林道を通って奥駈道に戻った」3年前今回歩くこの辺りでは記録的な雨が降り、崖が崩れ、川が溢れて大変な事になった、その名残だろうか、今もあちこちで補修中の場所やら、再起不能の場所やらが在ると聞く。晩飯は駅で買った弁当「明日は3時起床」この起床時間はオレにとって初めて、今までに暗い小屋で、隣のテントで暗闇の中ライトを点けて朝の支度をする登山者を何人もみた。うつらうつらしながら目を開けず「早い人がいるなあ」と感心していた。オレも3時起床ぐらいできるのだ。暗くなってからひとりまたひとり登山者が入ってきた、二人とも我々同様熊野まで行くという。そのひとは途中二度再会、最後のバス停で新宮から名古屋方面に帰って行った。小屋の中は4人、後からわかったが、雨で皆さん一日延ばしたようで、晴れていたら小さい小屋にたった4人だけでなくギューギュー詰めだったかもしれない。

2日目：予定通り3：00起床、キヌちゃんがオレのシラフを叩く、今までで一番の早起き、昨夜はアルコールも無いのに、7：00に寝た。夜中に強い雨がどんどん降っていたが、雨が上がりかけている。4：20 出発、真っ暗の中ライトを点けて林道を歩く、長い林道歩き、5時には明るくなる、林道にしゃがみ込んで朝飯、やはり駅で買った弁当。五番関からやっと正規の“大峯奥駈道”“女人結界門”をくぐって何度か来たことのある“山上ヶ岳”水が無いかも知れないとボトルに満タンの水を寺の宿坊でもらった。12：30 “小笹の宿”「ア、此処は以前来たことがあるような・・・」と幽かに思ったが忘れていた。穏やかな大地、雪が相当残っている、川が流れている、1時間前に“山上ヶ岳”で水を汲んだので重いめをした、下りとはいえ3リッターの水は重い、岩場・ガレ場の下りは怖い。

女人結界（女人禁制、鎌倉時代の法然、親鸞等は女人禁制には反対だったらしい）今時、まだこんな事を言っているのは“大峯奥駈道”の一部、それと国技と言われる大相撲の土俵の上だけらしい。何故女人禁制なのか、多くの意見理由が在るようで、無いようで、絶対的なものはないらしい。＜男は禊をし、身体を清浄に、禁欲に努め、白い衣装を着、六根清浄を唱えながら登る＞＜血で穢れる、男を惑わす、女は弱いので登れない、修行に耐えられない・・・＞いくつかの理由の中で、なるほどと納得したのは「山自身が女の神様、女神様なので、女神様そのものの山に、女が入ると、登ると、山の神様、女神様が、入って来た、登って来た、女に対して嫉妬する、女は来てはいけない」という意見が一番説得力があり、自然かなと思った。

大峯奥駈道は修験道の山道だ、奈良の吉野と熊野三山（熊野本宮大社：熊野速玉大社：熊野那智大社）を結ぶ修行場として開かれた山道だ。熊野古道の中の一つだそうだ。その歴史は千年以上に及び、日本古来の山岳信仰に、天台宗・真言宗などの仏教（密教）、日本古来の神道、大陸由来の道教などの習合らしい。修験者は山に籠って厳しい修行をして悟りを得る、その力で人々の苦悩を取り除き、人々を救済するのが目的だ。ところが明治政府は“修験禁止令”を出し修験道を禁止し、廃仏毀釈によって信仰に関するものが破壊された。シャーマニズムやアニミズムやらを「いかがわしいもの、惑わすものだ」という理由で禁止の命令を出したようだ。

3日目：“行者還小屋”では4時に目覚めた。隣に寝ていた津の人、48歳が3時頃から起きだし早々と発って行ったのをシラフの中でうつらうつらと見送った。昨日は4時過ぎに出発し小屋に着いたのが19時と15時間行動になってしまった。これまた今までで最高の行動時間だ、宿に着く2時間3時間前から疲れ切つてよれよれになっていたが、こんな時に危険な下りが続く「しっかりせんと、こんなところで足を踏み外したり、転んだりしたら・・・」言い聞かせて歩いた。因みにコースタイムは12時間「歳だねえ・・・」元々重いリュックに3リットルの水を追加したのがこたえたね。7日間のうち6日分の食糧を担いでこなければならぬ、荷を軽くするためにインスタントラーメンと米を10個ずつが主体、何時ものように旨いものは持てない持たない、晩飯は質素だ、持参の泡盛をちょっと飲みインスタントラーメンを作り乾燥ワカメを入れた。この小屋は綺麗で豪華だ、まだ木の香りがするようなログハウス、小屋には何枚かの毛布が置いてある、板張りの床に毛布を敷きその上にシラフを出して眠った、ダウンの上着とダウンのシラフ、暖かく夜はぐっすり眠れた、4時に外に出た時には星が出ていた、出発しようという時間になって霧が出てきた。7:15歩き出して一時間「下痢だ、おならをすとうんこが出ることがある、家ならいいが仕事場なら大変、パンツなしで一日中仕事せんとあかん・・・」これには笑ってしまった「オレなら黙っているね、よくある事だ、毎日のんでりゃそうなるね」ただ今キジウチ中。12:00“八経ヶ岳”（はっきょう）：今日は少し短くコースタイムで8時間、我々は10時間かかるかな。楽な日だと決め込みながら歩く。“弥仙”“八経ヶ岳”の登りはきつい、荷が肩に食い込む、雪を舐めた、雪が在るのは有難い、汚く積もった雪の上をストックで削ると真っ白な雪が表れる、それを指で掬って口に入れる「ひえっ」と冷たいが解けた水が旨い。昔も雪山で雪を口に入れたが冷たい為か腹の調子が悪くなった、今は雪が旨いし調子もいい。途中トラバースの所が大崩れ、崖崩れの場所、どんどん侵食している「やばい」小屋の寸前にも危険な個所がというように二か所もあった。“大峯奥駈道”は道のりが遠い、危険な個所が幾つか在る、営業小屋、水場が少ない。肝を冷やすと体力がどっと落ちる「こんな処が、危険な処が好きだ、スカッとする、快感」という人も多いが、オレはどうもだめだね。16:00“楊子の小屋”に着いた。何人かが居た、焚火をしていた、満員なので2階で寝ることになった、荷を背負って垂直の梯子を上った、床が貼ってあるが2cmずつの隙間、スノコ状態では煮炊きも出来ない、とにかく荷を出しシラフを出し寝る場所の確保、晚餐の材料とボトルを持って外へ、下の水場に水汲み、明日は出発してすぐに水場が在るので今日の晚餐分だけの水があればいい。「水場は下る」と教えられ下ったが何も無い、登り返したらテープが貼ってある、こんな近い処だったのかと水を汲んで帰りかけたら若者がいる「やあ」といったが後から聞くと彼は心配して見に来てくれたそうだ、ゴメン。

今回の大峯奥駈道歩こうの主催者キヌちゃんは「もちろん目的は修行」と宣言している、ならばオレは「オレは天の精霊・山の精霊・木の精霊に会いに行く」と決めた。キヌちゃんは白装束に服装を決め、靡（なびき-修行場・行場）の場所に行くとき杖を鳴らし経を唱えている。内緒の話だが白いズボン、袴ではなく建築現場で履くニッカポッカだ。1500メートルの高さの山の上はまだまだ雪が残っており、木々には芽が膨らみかけているだけで若葉はまだ無い、葉がまだ出ていない巨木、枯れてまっすぐ立っている巨木、風で倒れた巨木、太さも色も違う幹の上に細い枝が空の青さの中を縦横に走る。毎日それらの木々を見ていると感じるものが在る、何かを教えてくれようとしている、木の精霊と言わないまでも、人や動物とは違う異次元の価値観、異次元の空間が見えてくる、恐怖の念、畏敬の念が湧いてくる。

4日目：10：00“深仙の宿”という名の靡（修行場）にいる、深い山の中、前も後ろも上り下りという鞍部、そこが多少開けて、御堂と小さい小屋が立っている、陽が当たる、遠くの山々が見える、近くに岩が見える「いい感じの処だ、気持ちがいい」今朝は5時前“楊子の小屋”を出発、まだ真っ暗の中を黙々と進んだ。前に一人後ろに一人ライトの明かりが見えたがすぐに見えなくなった。2階に寝た6人全員同じように出発した、若い皆さんは早い、一晚だけでもう会わなかった人もいれば「おう」と再会する人も、若い人らはまだまだ元気で早い、どんどん行ってしまおう、我々はゆっくりだ。寒い、歩きだして身体は多少暖かくなってきたが手が冷たい手袋が欲しい、すぐに“鳥の水”という水場で朝飯、昨夜湯を入れておいたご飯のみ、水を汲みながら「水はこう寒いとたくさんいらぬ、雪もあるし・・・」この判断が甘かった、此処から先は雪が無く、晴れてポカポカ陽気が戻ってきた「もう少し水を汲めばよかった」とカラカラの喉、惜しみながら水を飲んだ。8：30“釈迦ヶ岳”に着いた、澤山さんと去年も来た、何度か来た、大きなブロンズの仏像が在る。「ここで半分は来た、半分過ぎたぞ」という。“大峯奥駈道”の行程の半分が終わったらしい。歩く、歩く、それだけで時間が過ぎていくと、何日経った、何泊したという事が臆げになってくる。「そうか今日は4泊目、屋には早い午前だが高い山はここまでか・・・」10時頃にはポカポカ陽気になってきた、朝のあの寒さが嘘のようだ、今夜の宿には水が在るらしいが、小屋に着くまでの半日、水は500CCしか残っていない、真っ青な空、先ほどまでは山の木々は冬の状態、幹と枝しか見えず、遠くの景色が見渡せた、ところがこの辺りにやって来ると、新芽・若芽が出だしている、鮮やかな赤紫のつつじが山肌にくつつも、昨日は雪を舐め舐め渴きを癒したが、白い雪の欠片も無い、1日だけ南に来た、少し高度が下がった、それだけなのに不思議だ。12時間かかり“持教の宿”に到着、1時間前から小屋に着いたらすぐに水を汲みに行き、腹いっぱい水を飲みたいと思っていた、小屋には人がおられた、天理から車で、GWの5日間ほど寝泊まりされる。小屋の管理をボランティアでやっているとおっしゃる穏やかな好々爺、と言っても歳はそう変わらないか。早速下の流れまで水汲み、ごくごく飲んだ「この川の水は、もうひとつだ・・・」と思いつつ。食事は相変わらず、ラーメンと御飯なり。

5日目 6：00“持教の宿”を出発、横に林道が在り車の姿も見える、この辺り巨木が多い、樹齢300年と書かれた“千年檜”続いてミズナラ、ブナも立派なやつが何本も、以前読んだ解説に元気なブナ林、若いブナ林、衰退気味のブナ林、観察するとその状態が色々あるらしいが、オレにはわからない、この立派で元気なブナたちはいい、木の精霊にまた近づけた。倒木もたくさん見た、上の尾根道にはたくさん倒れていた、風か大雨か、根元から倒れている、最近倒れた木、もう何年も経った倒木、腐り、キノコが生え、それでも何処からか新芽が出ているものも、木の根がむき出しだ、倒木からも精霊の風が吹く、山々が続く、今日も歩く。

13：00“行仙宿小屋”今日は休息日という事で行動は半日コース、小屋には昼過ぎに着いた。何人かの男が小屋の前でござごそやっている「やあ、お疲れさん、我々今から登山道の補修に行きます、紅茶が入ってますのでどうぞ」「行仙岳の登り道は崩れていたかな?」「早速で悪いが水を汲んできてくれますか、背負子に7リットルのポリタン着けたら楽ですよ」後からわかったが、迎えてくれた皆さんは“新宮グループ”小屋を運営管理している団体の方々に、道の補修もしている、しかも全く無料奉仕というより皆さん自身も寄付をしているありがたいグループだ。何処の山々でも杭を打ち込んだぐらいではすぐに傷む崩れる、いつの間にか誰かが修理してくれている、梯子、鎖、ロープが付いている、草が刈られている、倒木が切られている「誰がしてくれるのか、何処がお金を出すのか」何処の場合も実情は知らないが有難い事だ。「さあ水」と背負子に7リットルのポリタンを二つ結びつけ降りた、10分と書いてあるが、陰しい下り道、しかも時間が倍もかかる、梯子に鎖、どんどん下る、乾いた土と木の山肌、水の流れる音もしないと思っていると締め縄が見え奥に洞窟、綺麗な水がコンコンと湧いている、「まずは一杯」とゴクリと飲んだ、この水は旨い、お世話になった持教の水には申し訳ないがこちらの水は旨い。14リットルのポリタンを括り付け大汗をかいて登った。“新宮グループ”の方々が天ぷらを揚げだした「みなさん座ってください、皆様に今日はビール1本と山菜のてんぷらをご馳走します」旨かった、こういう人たちが荒廃していた“大峯奥駈道”を復活しも盛り上げ補修してくれている、オレはそんな道を歩いている。昨日の宿、今日の宿に1000円ずつ納めた。

6日目：今宵の宿は玉置神社、4時に入ると予約がしてあるそうで遅れてはいけない、3時起床4時出発、ライトを点け暗闇の中、おっとりゆっくり歩く。4時半頃になると東の空がややぼうっと色付きだし、向こうの景色が、山や木が朧げに見えてくる。「ぼ～・・ぼ～・・」初めは野鳩かと思ったがひょっとしてフクロウかな、そうなら野生の彼らをフクロウでもミミズクでも（学問上同じもの：フクロウが正解）いいが見たい、彼らはオレが見えているのだろうけど。どんどん歩くうちに、どんどん世界が白らけ明るくなっていく、ライトが要らなくなっていく、歩く歩く。大峯奥駈道の前半は“八経ヶ岳”1914メートル“釈迦ヶ岳”1799メートルと2000メートル近い高さが続き、後半は“証誠無漏岳（しょうじょうむろう）”1300メートル“笠捨山”1352メートルと低くなって、暖かい、新緑の世界、花満開の世界、街が人家が見えだす、林道が交わりだすと乗用車が通過する「これはつまらないねえ」と独り言を吐きつつ林道横の登山道を歩く。ここは奈良県十津川村、3年前の大雨、明治維新前の志士たち、その頃の大雨、山の村、木の村、この村はまた来たい。今日泊めてもらう玉置神社、聞くと予約が、誓約書がとややこしい。以前登山者が酔って無礼を働いたとかだそうだが、そんな規律戒律の厳しい処はちょっといやだねえ、神社は拝礼もした事が無い、お食事代として¥7000円を白紙に包んで渡すとか、と道々考えていた。4時、予定通り玉置神社に到着、「あ、お神酒が置いてある」こんな物には目の無い二人、かわらけ（素焼き）ならぬ白い皿（絵具を溶く皿に似ている）にうっすらと入れてまずは一杯ゴクリ、次は並々入れて「これでは口で迎えに行かなくては」とゴクリ、「お布施を多めに出したからいただき」とまたゴクリ、五杯六杯と重ねた。本堂では初めて拝礼「最初に鈴・・」ガンガン思い切って鳴らした、「二礼は軽く、最後は深く・・」二礼二拍一礼と拝んだ、今思えば何かを口にするのだった、願いを言うべきだった、黙っていてもわからない、とっさに何も考えなかった、願いが無かった。大きな杉が何本もある、鬱蒼とした杉の大木が凄い。泊り客は5名、昨夜の“行仙宿小屋”で近くに寝ていた50歳代の紳士（三田市）と信州大学山岳部出身小林さん（67歳・岐阜県とその友人）小林さんも吉野からだという、「膝が悪い」と立つのが辛そうながらさすが山岳部、歩きだすと我々と違う、鎖場なども上手いものだった。「風呂がある・・」これは凄い、水が少ないそうだが沸かしてある、有難く入れてもらう、6日ぶりに着替える、着ていた物はすぐにビニール袋に入れ密封、悪臭の話はしない、身体を2回洗い新しい下着、これは天国、靴が濡れているのはどうしようもないが。食事は旨い「何を食べても旨い」というが、素朴な煮物、高野豆腐にガンモドキにしいたけ、ゴマ豆腐、みそ汁、香の物、炊き立てごはんはみんな旨かった。玉置神社の悪口を言ったが、ゴメン、一般の人を泊めたらと思う、此処で泊まれないとテントが要るから、せっかくの大峯奥駈道という大縦走路だから。

円小角（えんのおずぬ：役行者）この名前は誰でも聞いたことがあるでしょう。奈良時代の実在の人物、奈良の山で修業し呪術に優れ、山岳宗教・修験道の基礎を築いた。だけれどその生涯が伝説となり尾ひれが付いている。

◎呪術（しゅじゅつマジック）をよく使い 前鬼・後鬼の鬼神を従えている。

◎伊豆大島に流刑になった際、毎夜海を渡り富士山に登っていた。小角：死亡100年後の“続日本紀”

◎新羅の山中で五百の虎を相手に法華経の講義を行った。

◎仏法を厚く敬う優婆塞（在家信者）だった。小角：死亡200年後の“日本霊異記”

◎雲に乗って仙人と遊ぶ、呪術を修め、鬼神を自由に操った。

像があちこちに在る。脛を出した老人が一本歯の高下駄を履き、巻物・錫杖を持ち、前鬼・後鬼を従えている。

山：古代の人が山を見るとき、一つには火山、突然爆発が起こり、火を噴き、揺れ、ガスが出る、というものすごい力ものすごい自然災害に、その超自然現象に対する、脅威と崇拝の気持ち。一つには水の恩恵と被害、農耕が始まれば、作物の育てる為になくならない水の供給源が山だった、また水害という供給源も山だった。一つには山は霊の住む処、死者の霊が山に登り雲に登る処、常世（とこよ）と現世（うつしよ）の狭間が山だった。日本人は山に入ってきたが、チベットなどでは信仰の山に入ることが禁止されていたらしい。山のその大きさ厳しさ自然環境に対して、人々は畏敬の念を持ち、山が持つ霊的な力を畏れ敬った。

7日目：いよいよ最終日、熊野本宮発、紀伊田辺行バスの最終は夕方5時、それまでには絶対に熊野本宮神社で参拝を終わらせ、バスに乗れば今宵は大阪だ、自分の布団だと7時就寝。3時起床、神社で作ってもらった朝飯用弁当を食い、布団をたたみ4:30出発した。ライトを点けて歩く、少し行くと舗装道路に出た、傍の空地にライトが光る、3張、4張のテント、玉置神社に泊まれなかった面々がここで一夜を過ごしたようだ「水は・」「玉置神社で汲んだよ」どンドン歩いた、登りだ、大峯奥駈道は最後まで「あそこまでは登らないと」フウフウさせてピークに立つとすぐに下り、急な下りが続く、下りが終わって鞍部に着くとまた登り、上り下りアップダウンの連続だ。昨日の風呂は有難かった、山頭火ではないけれど、小さい風呂桶の中わが金玉はフーラフラだ。「明日は雨らしい」と聞いていた、まだ降ってないが9時の今、何時降ってもおかしくない空模様、霧が立ち込めている、麓から見たらこれは雲なんだろうね。4時前に朝飯を食ったので腹が減ってきた、神社で作ってくれた昼用弁当を開けた、高菜で包んだおにぎり（めはり寿司-何百年も昔から南紀の農・山・魚村で労働者の弁当として伝わった、従来は麦飯でソフトボールの大きさ、目も口も大きく張って食うので、目張ると伝えられている）甘く煮た豆、煮もの、香の物、旨い、旨いが量が多い、いかに腹減りのオレでも、ぎっしり米の詰まったおにぎりが3個は多い、でも雨になったら弁当どころではない、今食べないと、言い訳しつつ食べた、旨い。この辺りは木が茂り青葉がいっぱいで景色は見えない、向こうは見えない、薄いピンクのシャクナゲ、山つつじ、白い小さな花をつける木、それらにつられてミツバチでも来ているのか、耳の周りがブンブン鳴るが姿は見えない。ポチポチ雨が降ってきた、きつい降りではないけれど雨具を着ようか「ええい今日は最終日、服が濡れてもいい、着替えは在る、雨具を着れば熱い、涼しい方が歩きやすい」濡れるに任せてどンドン歩いた。ザックにカバーをかけ、ポシェットのカメラはビニール袋に入れた、カメラ撮影はあきらめた。6日目7日目は林道と交錯する場所が増えだした、熊野川が見えだした、家も見える、田んぼも見える、いよいよ近付いてきた、最終目的地の熊野本宮大社には2時頃着いた、早く着いたと思ったが今日も10時間行動だ、GW最中、観光地のこの辺りは人でいっぱいだ、人・人・人、観光地だ。昨日聞いたが「最後に熊野川を歩いて渡りたい」と皆さんが言う、何のことも知らなかったが、吉野から歩いて、最後に熊野川をじゃぶじゃぶ歩いて本宮に入るのが本筋らしい。もう少し暖かい修験道の季節になると、吉野から歩いて来た修験者の一行が、10人20人の白装束を着た修験者が一列になって川を渡るそうだ、法螺貝をぼうぼう吹きながら歩くそうだ。ならばそれもしたい「靴を脱ぎ、ズボンをまくり上げ、靴下はそのまま渡渉しよう、靴下はもう一足替えがある」などと思案していた。手前で荷を整理していると「アカン、水が多い、流れが速い、あれは危険」と偵察のキヌちゃんが帰って来た、残念。何時の日にか渡渉だけの為にまた来よう。本殿前で「二礼・二拍・一礼」をしてコンビニでビールと弁当を買い、バス停へ、臨時の特急バスが20分後に出る。JR紀伊田辺駅で酒・ワイン・魚・あてを仕入れて特急列車“くろしお号”の乗客となった、飲んだ食った旨い、大阪に着いても一軒寄った、酔った、まだまだ重い、遅くに家に着いた、時間はわからない、風呂に入ってすぐに寝た。これで大峯奥駈道は終わった。

1年前には気軽に「行こう・・・」と話していたが、2,3か月前になると「7日間も、山歩きじゃなく修行、荷が重いのは・・・」と気持ちが萎えてきた、「だめなら途中で棄権してもいい、行ける処まで行こう」「よし、行こう」と始めたが、1日目2日目には「この荷の重さは、この長時間行動は、この上り下りは・・・」「棄権!」と冗談で話しつつ、3日目4日目になると「せつかくここまで来たのだから、続けるぞ」と歩き出した、食糧を日々食う事で、その重さが少しずつ軽くなってきた。ここ大峯奥駈道は、信州の山、他所の山と違って、修験道の山という意味合いが強い、もちろんオレも含めて、普通の登山者が歩き楽しむのはそれでいい。修験道者の姿を見る山は他にも幾つかあった、石槌山、御嶽山もそうだった、知らないだけでもっとあるのだろう。山の中で若い男が下半身を勃起させ、山の女神様に見せつけお慰みをする、というような話を聞いたことがある。すべての物が神であり、霊であり、それを感じ、畏れ、敬う。今回たった7日間山に居ただけ、歩いただけだけれど、山の霊気、空気、風を感じた、嬉しかった。歩きながら絵の事も考えた、「やはりあれはこうしよう・・・」と作戦を練った、今、あれから1週間が経ち、日々アトリエに居て、ゆっくりとオレは回転している。

「そんな胡散臭い、怪しげな物が・・・」「そんな非論理的なことが・・・」という事が、事柄が、話しが、説話が、人が語ることが、よく在った、今までそういうものには近付かなかった、分かつたしなかつた、無視していた。先日の大峰修験道でも考えさせられた、日本の中世・近代に盛んに行われていた事や考え方を、本や話で知るに及んで「いいじゃないか・・・」「これは素晴らしい・・・」と思う事が多々出てきた。今まで、思っていた事、分かっていた事、考えてきた事が間違いとまでは言わないが、真実の一部、本当の事の一部ではないかというように思い始めた。明治の前後に欧米の先進国が日本にやってきた「欧米列強に学べ、欧米に追い付け、追い越せ」の掛け声の100年、また100年。中国・朝鮮は日本から見て先進国、それこそ「中国・朝鮮に学べ、中国・朝鮮に追い付け、追い越せ」そのような事はつい最近までそうだったのでは。中国・朝鮮を含めたアジア、そして日本に嘗て在った、思想・考え方、風習・風俗、宗教・信仰、そういうものを100年200年の日本は否定した、お上、政府は欧米の考え方に沿わない、理解できない、そういうものを禁止廃止せよという命令をした。「ああいうものは要らない、誤っている、触れてはいけない」というように、それこそ汚物、危険物、黴菌のように宣伝し嫌わせた。戦国時代の一向宗、キリスト教などは武士と平民が平等ではいけないという理由、陰陽道が人心を不安にさせるという理由で禁止されたが。最近日本民族の話、古代の日本人が持っていた物、近隣のアジア諸国からやって来たもの、その中には、シャーマニズムやアニミズムや、それこそ“いかがわしいもの”“怪しげなもの”がたくさんある。そういうようなものにこれから関わっていききたい、見てみたい、感じてみたい、不思議な考え方、魅力的な行動、恐ろしい事、打ち震えるような感動、そんなことが多く内在する“いかがわしいもの”“怪しげなもの”に気持ちがワクワクする。

“歌舞音曲”とはいかにも古臭い表現だが、オレの知人友人そのまた知人友人の中には、歌舞音曲が好きだというような方が大勢いる、そんな人たちの中に好きが昂じ本職になった人もいる、農家の子弟、商家の子弟、いろんな職種の子弟、が歌に狂い、踊りに嵌まり、楽器を奏でる。芝居などの舞台を好きになり、見るだけでは我慢ならず、役者の世界に、芸能の世界に片足を突っ込み、本職になっていった人の話を聞く。明治以降に文部省が推進した音楽・美術は、堂々と官立大学があり、そこを卒業すると演奏家や作家には成れなくても、教師の職業が在りそれなりに飯が食えた。仲間の中には、芝居人になった人、露天商になった人、踊りを舞っている人、様々な人が居る。時代を遡ってみれば差別される職種、蔑まれる職種なのかもしれないが、好きな歌舞音曲を仕事にして毎日それを楽しむのは素晴らしい、創作の仕事が好きだ、物造りの仕事が好きだ、魅せられている、と日々工房で物を造っている人、これもまた素晴らしい。正業の仕事身分を棄て、そういう世界に好き勝手に入り込んだ人も多くいたはず。士農工商だけが仕事じゃないのだ。

知人に絵描きの“Nちゃん”がいる、“Nちゃん”は40歳を過ぎたばかりで若い、元気だ、オレと同じように抽象画を描いている「本当にもっといい絵を描きたい、いい絵を描いて売りたい」とその若さ故に向上心も大きく前向きだ、外国では抽象画の評価も大きいと聞き「出来る事なら少しの間でも外国で絵を描きたい、外国で売り出したい」と願っている。オレも昔経験した、外国の画商に言われた「住んでくれ、此処で暮らしてくれたら、展覧会をしてみたい、此処に住まない限りはなかなか難しい」要はゲストではダメ、地元の人に成りきって欲しいという事だ。ヨーロッパでもアメリカでも友人たちの何人かが暮らしている、それなりに生活ができて暮らしている、オレはそれが出来なかった、踏ん切れなかった、日本に帰った。

オレはオレなりに“デカダンス”ではないと思いつつも、人一倍そうかもしれない、非常に神経質で、またその反対で全く無神経であったり、自身の事はわからない、分からないなりに“いい人”“立派な人”“尊敬される人”でありたいというのは人の常だ。

“恥ずかしがり屋”はそうだね、絶対に、人前というのは嫌だね、こればかりは「はっきり、恥ずかしいね」

此処は5年、6年前に一人で来ている、丁度その時登山口に在るお寺のお堂を建立していた、柱と棟、屋根が在ったか、真新しい白木が目眩しかった、その傍を登りだしたのを覚えている。＜明王院は1200年も前に建立された寺だそうだ、修復工事は10年前のようだ、オレの目もいい加減なもの、新築で白木が目眩しかったとはよく言えたものである。明王院は比叡山を代表する回峰行の拠点のようだ、大峯修験者と違い頭に藁束を巻いたようなものを二本乗せた修験者の姿を見たことがあるが、あの筒状のものは何だろう＞今、見ると二棟、三棟立派なお堂が在る、正面が本堂だろうけど、新築と思っていたが解体修理だったようだ「柱が棟が見えたのはどれか・・・」と迷いながら見るに、どれも同じように古びて貫禄が付いている、屋根は檜肌葺きなのか黒光りがしているが形はまだまだしっかりしている、軒先の白色、朱色に塗られた柱、それぞれ建立されたばかりの毛羽立った色が渋く落ち着いている、穏やかな色が後ろの山肌に、周りの木々の緑に融け込んで堂々と建っている。角張った石を無造作に積み上げたように見える石垣が、いかにも構っていないと思わせながら見事に調和している「この石垣はいいね、素晴らしい」狭い石垣と石垣の間を通り抜け、巨木の隙間から降り注ぐ陽の光が石垣を斑に染めキラキラする中を歩いた。

いつもの“相さん・垣さん・前さん”とオレの4人で、相さんの車が停まっている駐車場に集合、9時前に坊村駐車場に到着、登山スタイルに着替え出発したのが9時過ぎ、葛川の橋を渡りトイレを利用、明王院の前を通り登山口、いきなり登り始める「エンヤコラ・ドッコイショ・・・」登りが続く、斜面を右に左にジグザグ登っていく、それでも手を使って“四つん這い”の姿勢にならないで登れる、二本足で登れる、歩いて登れる「サア、エンヤコラ・・・」前回来たときは「こんなに遠かったかな・・・」と思ったが今日は快調、軽く歩ける、気持ちがいい。先日の大嶺奥駈道を重い荷を背負って歩く事に比べれば、十数時間行動に比べれば、弁当と水だけのDAYBAG（デイバッグ）荷が無いのと同じぐらいに軽い、1時間も歩くときつい登りが終わり軽々と歩ける。地図を持ってこなかった「上まで何時間？」と聞かれ「あれれ」と思っていると近くで休憩していた人の話「コースタイムは2時間半らしいよ」「ならばもう1時間ぐらいで頂上だ」歩いていると左手にポコリと小さい尾根が見える「あれではないはず、あんなに木が生えていないはず」と進むうちに本当の頂上が見え始めた。天気はいい、雲が少しあるだけの青空、風も無い。杉の植林帯が過ぎるといよいよブナが出始めた、此処のブナはみんなが細い、若いひよろひよろブナばかり、武奈ヶ岳の稜線がきれいに見え始めた、ここらあたりから木が無くなる、たった1200メートルの高さだけれど、冬の風と雪の所為なのか、曲がった木、低い木、細い木だけしかない。登っている人が見える、小さく見える、いい景色だ。お姉さんがスケッチをしている、オレも描いてみよう、写真ばかりじゃ能が無い。常にウエストポーチにカメラを入れている、カメラだけでなくペットボトル、スケッチブックと筆記用具、調理用ナイフ、箸にスプーン、歯ブラシに簡単菓。昔は小型のカメラは持たなかった、澤山さんがどんどん写してくれた、しかも一眼レフで、フィルムで。オレも小さいカメラを買った、次に小さい一眼レフを買った、湿気と寒さで壊れたので今は多少重い一眼レフを持ち歩いている。ウエストポーチからスケッチブックと鉛筆を取り出して山の形を木の形を描いた、風景はいつも思うが苦手だけれど「ま、なんとか・・・」といくつか描いた、描けば面白い、自由に線が走る。頂上には10人20人の人が居た、此処では狭すぎるので少し下ったところで昼飯。定番“自家製野菜だけ炒めと御飯”「おにぎり、食べて」と破竹のおにぎり、こんなに食えるかなと思いながら食えるものだ、すんなり入った。「きゅうりの漬物、食べて」これまた旨い、ご飯が進む。最近オレが凝っている玄米ご飯、それにもち米を入れたり、小豆を入れたり工夫しながら「ご飯が旨い」と思い始めた、今までは「そらあ、オレはパンだ」と言っていたが、「ご飯も旨いもんだ」と変わりつつあるとはいえ、まだまだパンが上位だけれど。下りは苦も無くさっさと降り、陽のあるうちに帰り着いた。

坊村を通る道は、古くから若狭湾“小浜”と“京”の町を結ぶ“若狭街道”だった。昔は一日がかりで鯖を運んだ“鯖街道”が幾つか在り“若狭街道”もそのひとつらしい。前にも読んだがこの辺り1600年頃にバスの終点“梅の木”辺りで大きな山崩れが在り大量の土砂が川を堰き止め、たくさんの人が亡くなっただけで、1000年以上の歴史は長い、見聞きするといろんなことが出てくる、これまた面白い。

服部英雄著<河原ノ者・非人・秀吉>を読んで-I。

どこで生まれたのか。その一点だけで生涯、差別・迫害される。差別を受けてきた人は、なぜかくも不当な仕打ちを受けるのか、理由を知りたいと強く望んでいる、科学の進んだ今の社会で、なお差別が残るのはなぜか。被差別民衆史、賤視の歴史の解明は歴史学にとって、最重要な課題であるけれど、現実の人権問題に深くかかわり、研究には制約が多い。中世資料を見ていると、近代にまでつながるような差別事象が、しばしば見つかる。差別の近世政治起源説を教えられてきた人々の意識とはずれるかもしれない。差別に耐えながらも、誇りを持って生きてきた人々、社会の重要な役割を担って貢献した人々、そうした得難い力を持つ人々の生活を明らかにするなかで、差別のない社会の実現に寄与したい。と始まる。服部英雄先生の説を解説を読んで、「なるほど、そういう事か」と納得いく部分がたくさんあった「人間が人間を支えていた、支え合っていた」とほっとする部分もあった、ただ一概に言えない「差別、区別」と簡単に言うが、古文書に書かれた記録がどっさりある。千年以上の歴史、時代によって違う話もある、九州から東北まで狭いようで日本は広い、その土地その土地によって違う話もある、一概には言えない、学者先生たちは三次元、四次元に広がり絡まった話を解きほぐそうとしているが、そういう事は先生たちに任せよう。本に書かれた中身の話を後回しにして、三田村鳶魚（えんぎょ—1952年没）江戸時代の風俗・史実を執筆した人の話を、100年ぐらい前のあからさまな言葉を。ただ“せぶり”“世間師”の言葉の使い方が服部英雄先生の本の内容と異なる・・・？ 次に服部英雄先生の最後のあとがきを紹介します。先生の本の中身の話は次回-IIで。

◎三田村鳶魚：物貰いには三種ある。第一は非人から出るやつ、第二は乞胸から出るやつ、第三は願人坊主、まず非人から出る物貰いもまた二種ある。一つは「せぶり」一つは「世間師」どういう違いがあるのかと言いますと「せぶり」というのは代々、親の代から非人で、これは良民に還る事ができない。「せぶり」は胸に袋を懸ける、物貰いの中ではお歴々の訳です。この連中は野宿をします。「世間師」の方は身を持ち崩し、自分で乞食の群れに落ちたやつで、足を洗えば何時でも良民に還れるのです。「世間師」の方は野宿はできない、もし野宿をすればせぶりがひどい目に遭わせる、リンチを加えるわけです。ですからおあしが在れば木賃宿に泊まる、さもなければ堂とか社とかいうものの下へ行って寝る。新非人、薦被り、宿無しというのは「世間師」の事です。非人小屋というのは、お救い小屋とも書かる。米問屋が粥施行をやった時、一つは非人小屋、一つは素人小屋と分けている。物貰いでも腹からの者と落ちぶれ者と二つに分けたので、素人と言っているのはおかしな話です。窮民とか、碍災民（被災者）という意味なのでしょう。勿論非人の仲間には入っていない、新非人というのも、一時貰いという心持があるらしいですが、新非人という言葉が記録に無くなったことは実に喜ばしい事と思います。

◎服部英雄（1947年～オレと同世代）：40年前著者が学生の頃、岡林信康作詞作曲の歌「手紙」という歌があった。「わたしのすきなみつるさんは」に始まり「部落に生まれた、そのことの、どこが悪い、何がちがう」という歌詞だった、あまり流行しなかったけれど、青春時代に涙した歌だった。歴史の仕事について被差別部落での聞き取りを行ってみると、この時代に結婚差別を受けたものの、克服し得た体験を聞く事ができた。教育者のはずの義父が孫の顔を見るまで10年以上もかかった。また別の御嬢さんが「おとうさん、この結婚は無理です、諦めます」と泣かれた話では、回想されながら、さすがに胸が詰まるようであった。結婚に至っても、まちかの父母が認めても、叔父叔母が反対したというケースが多かった。父母は我が子を信頼し、この選択を支持するが、本人を知らない親戚が反対する、破局にいたるまで徹底的に追い詰める。本人を知りさえすれば、差別したことを反省する、理解できれば、逆の立場になって考える。逆になれば差別の非人道性を痛感するのは当然だ。悲しい事に知らない人間だけが差別を続ける。

各地の太鼓屋さんと連絡を取って胴内の墨書銘文を集めている。太鼓胴内の墨書は通常見る事ができない、皮張り替えの時しか読めない。だが書かれた花押のなんと立派な事か。当時は百姓も文字や苗字を持たず、ましてや花押の使用は無かった。時代を経ながらも、彼らの誇りを痛いほど読み取りうる。編集担当の方とは差別を憎む心を共有してきた・・・。

服部英雄著<河原ノ者・非人・秀吉>を読んで-Ⅱ。

中世の資料に多く見られる被差別民は1) 河原ノ者 2) 非人 3) 声聞師 (しょうもじ)

1) 河原ノ者：皮革制作が主な仕事で、皮革生産者。河原者はエタ、穢多としても登場する。刑吏・清掃・井戸掘り・作庭・土木工事・野犬狩り・獣医・・・

2) 非人：基本は物乞い、中心にライ患者 (ハンセン病) や障害者、健康な者もいて、病苦者の管理世話をした。

3) 声聞師 (しょうもじ)：陰陽道・暦・久世舞・鐘打ち・経読み

非人の場合は転落もあれば上昇もあった。しかし河原ノ者の場合、脱賤はあり得なかったと考える。両者の通婚も無かった。

◎“犬追物”「これがどうしたと思った、昔から絵巻物を見て知っていた、馬上の武士が犬を弓で射るだけの事だ」改めてこの本を読むと犬追物は各大名家の大きなイベントだったようだ。100疋 (匹) 300疋という数の犬を集め、当日まで犬を飼い、犬追物当日は馬場における犬の管理と競技の進行、競技終了後の犬の処置。150疋の犬に150人の河原ノ者が付いた。土俵の中で一人の河原ノ者が犬を放つ、犬の扱いに慣れた機敏さが要求された。競技後興奮した150疋の犬を150人の河原ノ者が回収した。馬糞、犬糞、血で汚れた馬場を清掃する。絵を見ると馬場を走る男がたくさん居る、犬を見て、弓を射る騎手を見て走っている。犬追物が鷹の餌のための殺犬、食犬としても語られる。河原ノ者は、親も子供も河原ノ者、その身分は変わらなかった、脱賤できなかった。当時、土木事業において、重源や叡尊のような卓越した高僧や被差別大衆の河原ノ者は、土木事業に長けた力とカリスマ性を持っていた、高い技術を持ち、それ故に高収入を得る、誇り高き人たちもいたらしい。

◎中世、奈良は大都会だった。東大寺や興福寺への参詣道を多くの善男善女が歩いた、一方、これらの道は貧者、病者の道でもあった。喜捨を乞い、施しを受けて生活する貧者、病者は“非人”であり、彼らが住まう村を“非人宿”といった。発病、罹患によって町や村の“良民”が“賤民・非人”の身分に転落した。彼らの面倒を見る者も“非人”だった。奈良以外の各地にも“非人宿”宿 (夙) があった。

鎌倉時代に僧：叡尊と宿との古文書が残されている。<受癩病之者在之由 承及時者・・・>

ライになったものが居ると聞いたら、非人宿から穏便な使者をだし、本人と親類を交えてよく相談し、在家にては生活の継続が出来ないという結論を得て家を出るならばよいのだけれど、そうでないなら、長吏が誠意を尽くして、煩ら (わずらい一紛争) を留めるべきである。この趣旨に背いて、多額の用途 (礼金品) を取ろうとして。大人数の非人を派遣して、責め立て恥をかかせる事はあってはならない。重病となったライ患者 (非人) が、京では町に出て乞食をする慣わしである。この時侮辱するような言葉を浴びせてはならない。

別の古文書には：非人宿の組織に入っていない、家や路傍に居るライ患者がおり、見たり聞いたりしても、あれこれ干渉してはならない、本人たちの意に任せるべきである。

非田院・救癩患者施設 (収容施設) 孤児の保護・病苦の人の収容。というのもあったようだ。

被差別大衆、非人と一口には語れない、千年以上の歴史、北から南まで色々な地方の事情が交錯している。学者が古文書を読み考え、ますます窓口が広がっている「あの時代にあそこではこういう事が行われていた」と言う個々の列記は先生方に任せるとして、被差別大衆、非人と言われた人たちが「生きていた、いきいきと生活していた」事実が知り得た。

◎子が授かる方法：差別とは異なる話かもしれないが、昔の民俗話が“秀吉”の項に載っていた。

子どものいない夫婦が、子供が授かるよう神仏に願掛けをして、通夜参籠する。満願近く、毎日毎夜の読経三昧で宗教的陶醉が頂点に達すると、妻が法悦を体験し、やがて子が授かった。子は神仏の申し子として大切にされた。参籠の場が、男女交合の場になったと指摘する。宗教的陶醉があれば、神仏と一体になれば、子種が変わっても罪悪感は無くなる。